

# 鬼瓦のルーツを尋ねて 韓国へ ⑦

初めての韓国、まず釜山へ

前橋市 富山 弘毅

はたして韓国に「鬼」はいるのか。それとも中国のように「龍」と「三蔵法師一行」、あるいは「鷗尾（しび）」ばかりなのか。

韓国語を勉強し始めたばかりで「アンニョンハセヨ」と「カムサハムニダ」くらいしか覚えていないので心もとないけれど（本当は「チャルモゴッサムニダ=ごちそうさま」もおぼえたのですが）、まあ、とにかく覚悟して「下見」をしたいと、妻・好子と出かけたのが2003年9月でした。

「日本旅行」のベストツアー「韓国歴史探訪の旅6日間 釜山・慶州・大田・ソウル」というのを選びました。さっと一回りできると同時に、最少催行人数が4人で催行が確実視されたからです。現地ガイドがつくこと、自由行動日がソウルで丸1日あることも魅力でした。お天気が安定する秋を選んだのですが、結果としては雨の日が多くてハズレでした。



釜山 龍頭山公園で

成田を飛び立って、昼すぎに釜山空港に着くと、出口に札を掲げて女性ガイド崔賢珠(チェヒョンジュ)さんが迎えてくれて、そこではじめて参加者が私たち夫婦だけだということがわかりました。ラッキー！ 結果として個人旅

行みたいになったのです。いくらか、わがままがきくかも！

「夕食後、釜山名物の屋台街へご案内」という予定をキャンセルし、2日目の予定を前倒ししてもらいました。龍頭山公園の

高い展望塔にエレベーターで登り、広い景色を一望して、ヒョイと見下ろすと、真下にお寺があるではありませんか。私にとって寺といえば、鬼瓦。鬼瓦探しの旅が早速、始まりました。

大覚寺(デガクサ)でした。繁華街の真ん中で、それほど古い寺ではないとガイドが言います。総瓦屋根で、西日の当たる屋根を東側から見るので写真にならないのですが、大棟の端は、どうやら龍のようでした。隅瓦は草履型で、平面にへらで彫りを入れたようなもの。ノッペラボウではあまりにも愛想がないのでちょっといたずらしたかのようにも見えました。のちに多くの古建築を見て回り、これが多いことがわかるのですが、鬼面の瓦はありませんでした。



釜山 チャガルチ市場の魚屋さん

チャガルチ市場は、生きのよい魚類がいっぱい、人もいっぱいのみごとでしたが、旅の初日に買いたくなるものもなく、さっさと通りぬけました。ガイドは「決まりですので」と、渋滞の中をあまり新しくない乗用車でロッテ免税店へ連れて行ってくれましたが、私たちには買い物もなく、ガイドのマージンにはなりませんでした。

夕食の海鮮料理はおいしく、別室で多分粗末な食事をあてがわれているであろうガイドを呼んで、いっしょに海鮮なべを食べました。釜山の郊外に住み、一生懸命日本語を学んでいる可愛い娘さんでした。

## 通度寺で早くも発見

疲れて、とにかく眠るだけだったホテルに、翌朝、ガイドが迎えに来てくれて、慶州へ向かい、途中で通度寺（トンドサ）に寄りました。韓国三宝寺のひとつに数えられる名刹です。



通度寺入口で ガイド崔賢珠さん（中央）と

こういうところにこそ、鬼瓦があるのではないか。胸が高鳴ります。

そして、早くも、鬼瓦の親戚みたいなもの出会いました。鬼板なのですが、棟端瓦の下を飾っているのです。



通度寺  
光明殿 鬼板



通度寺 梵鐘楼（極彩色で堂々としている）

感動的な古建築が幾棟もあって、それらに見とれながら鬼探しをしている私を、妻とガイドは呆れ顔で見えています。

わたしは、栗のような形の小型の棟端瓦、隅瓦を発見していました。おもわず「かわいい！」とっていました。（次ページに写真）

後でわかるのですが、このデザインの瓦が韓国では定番で、かなり好まれ、量産されているようです。私は「鬼瓦」と呼びたいのですが、呼び名はわかりません。

## 秀吉の侵略を謝って

慶州（キョンジュ）で石焼ピビンバの昼食をとって、お定まりのコースである石窟庵、仏国寺、古墳公園を回りました。

名刹・仏国寺（ブククサ）は、新羅時代の535年の創建です。日本に百済から仏教が伝わった538年と同時期です。774年に伽藍の大規模化を完成し、現在の10倍の規模を誇る大寺院になり、同時に石窟庵を造営したと伝えられています。

その仏国寺が、1592年の豊臣秀吉の朝鮮出兵で、ほとんど焼かれ、石造部分だけが残りました。どんな鬼瓦が載っていたのでしょうか。それらも破壊されました。

仏国寺だけではありません。朝鮮半島の古刹はほとんど全部、秀吉の侵略軍によって焼かれました。日本軍に抵抗する民衆は寺院を拠点に戦い、だからこそまた、寺院



通度寺 説法堂



扶余 阜蘭寺（通度寺 説法堂と同範だが少し違う）



仏国寺 大雄殿



高麗白磁の天馬窯（慶州）の屋根に

はねらい打ちされました。今残る寺院は、古刹とは言っても、秀吉侵略のあと再建されたものがほとんどです。だから、鬼瓦もまた、それ以降のものとなります。

ガイドをはじめ、現地の人に語りかける場合には、私はまず秀吉軍の侵略を謝り、さらに大日本帝国による暴虐を詫びることから始めなければなりませんでした。

でも、ガイドは日本批判にかかわりそうな話は絶対にしません。こちらが水を向けると、「そういうこともありましたね」「でも過去のことですから」「これから仲良くすることが大事でしょう」などと、当たり障りのない対応をします。ガイドの心得として、そう教育されているのでしょう。

仏国寺には、みごとな鬼がいました。これは棟端瓦で上下に同範のものがついています（写真左下）。感動的です。

## 百済の都・扶余へ

3日目、慶州駅で別れる崔ガイドに、妻は茨木のり子著の「ハンゲルへの旅」をプレゼントし、とても喜ばれました。

セマウル号はソウルを通過して大田（デジョン）へ。駅前にかかなり疲れたライトバンと男性運転手、そして英語塾の先生をしていたという女性ガイド金さんが待っていました。車はガタガタ揺れ、道は大混雑。韓国のお盆・仲秋佳節（9月12日）で郷里に帰る人のためと知って納得しました。

私達が質問したのがきっかけで、金ガイドは、韓国では儒教思想のため女性の地位が低いこと、伝統に縛られ、親や祖先は絶対で、長男の嫁はお盆や祖先の命日などのたびに帰ってくる親族をもてなすだけでも大変だなどと、語りました。

そして、日本人男性からもプロポーズされていること、親は猛反対しているが韓国の男性と結婚するのはどうも、などと、悩

## 名刹・仏国寺



仏国寺 崑盧殿 鬼板

みを語っていました。

私は「日本の男性だって、みんな私のようにいい人とは限らないですよ」と言おうかなと一瞬思いましたが、黙っていました。車酔いで吐きそうだったのです。

日本にあらゆる文化と、もしかしたらわれわれの祖先を送り込んだ百濟（くだら）の最後の都・扶余（プヨ）。瓦博士もここから来たのです。白馬江下りで落花生を見て、皐蘭寺（コランサ）に寄った時にはかなりの雨でしたが、寺を一回りして通度寺や仏国寺と同範の鬼瓦を発見しました。

国立扶余博物館では、感激しました。瓦ではなく、仏堂の壁を覆ったり仏像の台座を飾ったりしたといわれる磚（せん＝煉瓦に近い焼き物）なのですが、すばらしい鬼、日本の鬼瓦・平城京型の元になったと思われるデザインの怪物「鬼形文磚」が、二つも展示されていたのです。



国立扶余博物館 鬼形文磚（上・下とも）



4日目は水原華城（スウォンワソン）の砦で、鬼の顔をひとつだけ見つけました。



水原華城の砦に鬼

### ハンゲルの父に感謝の挨拶

午後、ソウルについて、昌徳宮（チャンドグン）、宗廟（チョンミョ）を見学しましたが鬼は見つかりませんでした。

5日目は完全なフリータイム。午前中、徳寿宮（トクスグン）にあるハンゲルの父・李氏朝鮮第4代国王の世宗李王の像にご挨拶しました。ハンゲルは彼が1446年に「訓民正音」（훈민정음, フンミンジョンウム）の名で公布したものです。



ソウル 徳寿宮  
ハンゲルの父  
世宗大王の銅像

妻と別行動で仁寺洞（ニンサドン）にある曹溪宗本山の曹溪寺を訪ねたら改修中でしたが、法要をのぞいて手を合わせました。龍はいても、鬼はいませんでした。

すばらしい南大門を眺め、日本人観光客がいっぱいの明洞（ミョンドン）で本場の参鶏湯（サムゲタン）を味わって、下見の鬼探し旅は終わりました。どうやら韓国にも鬼はいるようだな、ようし、この次はちゃんとしたカメラを担いで来るぞ、と思ったのでした。（つづく）